

第4章 レフェリーの手順

レフェリーに関する基本的手順を理解する

本章では、以下の項目を学習する：

- オフィシャルにふさわしい服装と用具
- レフェリーの一般的な任務と手順

100%

100%

< オフィシャルの用具 >

オフィシャルは、その任務に対して精神的・肉体的準備ができていなければならない（写真1～3参照）。オフィシャルは、氷の外でも上でもプロに見えなければならず、その任務を安全に果たすために適切に用具によって守られていなければならない。



写真1



写真2

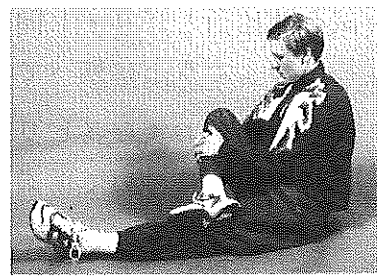


写真3

〔最低限必要な用具〕

- 黒のヘルメット
- 公認のハーフバイザー
- I I H F ルールブック
- すね当て
- ひざ当て
- ノーファールカップ
- プレスされた黒のズボン
- 金属またはプラスチック製ホイッスル
- 磨かれた黒のスケート（白のくつ紐）
- ひじ当て
- 左胸に日ア連のワッペンをついた
清潔な白黒縦縞セーター
- メジャー

〔随意の用具〕

- 公式スティックゲージ
- I I H F ケースブック
- 針と糸
- パック
- レフェリー手帳と鉛筆
- 競技役員マニュアル
- レフェリー・マニュアル
- ガードル
- 黒のレフェリーバッグ
- 予備の安全ピン
- ストーン
- 予備のくつ紐（白）
- 予備のホイッスル
- タオルと石けん

＜レフェリーの任務＞

- オフィシャルは遅くとも試合開始45分前にはリンクに到着していること。
- 氷上に上がる前にオフィシャル・ゲームシートをチェックすること。キャプテンとキャプテン代行がそのシートに記されているか、またチーム・オフィシャルのサインがされているかを確認すること。最高6人のチーム・オフィシャルがプレイヤーズ・ベンチに入ることを認められており、正当に登録されゲームシートに記載されていなければならない。
- ラインズマンと、手順や任務について特に注意しておきたい点を話し合う。
- 試合開始前とピリオド開始前には選手より早く氷上に上がる。そして選手が氷上から出るまで氷上に残っていること。
- 試合開始前および各ピリオド開始前には、すべてのオフアイス・オフィシャル（競技役員）が位置について準備が完了しているかを確認すること。
- オフアイス・オフィシャルと共に、計時装置とブザーが適切に作動するかを確認すること。
- 試合開始前に両チームの選手の人数を確認すること。氷上もしくはベンチ内の選手の人数は、オフィシャル・ゲームシート上の人数と同じ、またはそれより少数でなければならない。
- 試合終了後には、オフィシャル・ゲームシートを確認し、サインしてオフィシャル・スコアラーに戻すこと。
- リンクのコンディションもしくはマークがIIHFまたは日ア連の基準に適合しない場合は、その旨を日ア連会長およびレフェリー委員長に報告すること。

〔フェアプレーの提唱〕

すべての試合に於て、両チームのキャプテンとオフィシャルは、レフェリー・サークルに集合し互いに紹介しなければならない。この手順に15秒以上をかけてはならず、試合開始前、ウォームアップ終了後に行われなければならない。オフィシャルは両チームのキャプテンおよびコーチと握手することが望ましい。

〔試合開始前の任務〕

- オフィシャル・スコアラーが試合開始前にゲームレポートを持ってきた際には、それをチェックし、すべてが記載され両チームのオフィシャルのサインが正確にされているかを確認しなければならない。

- 各々のラインズマンに、1チーム分ずつスターティング・ラインナップを手渡し、レフェリーに代わって正しいスターティング・ラインナップが氷上にいるか否かを確認させる。
- 各々のラインズマンに、1チーム分ずつゲームシートに記載された通りの人数の選手が試合開始前に防具を着用しているかを確認させる。人数が異なる場合は、レフェリーとして直ちに問題を確認し、その試合で起こり得る問題を可能な限り事前に取り去るものとする（ゲームシートに記載されていない選手が得点した場合など）。
- 氷上に行く前に、第503条に記載されている、試合におけるラインズマンの責任についてラインズマンと簡単な打ち合わせをすること。
- 試合開始予定時刻5分前にはラインズマンと共に氷上に入ること。
- 氷上に入った後は、オフアイス・オフィシャル全員が正しい位置についているかを確認すること。ペナルティ・ベンチにいるオフィシャルがその任務に慣れているかを素早くチェックすること。観客もしくは試合の進行に関係のない余分な人員をペナルティ・ベンチ付近から退去させること。
- そのリンクの特性をチェックし、特にビジター・チームがそのアリーナでそれまでに試合をしたことがない場合には、その特性をビジター・チームに伝えること。これによって試合中の混乱を避けることができる。
- スケーティングのウォームアップは、威厳ある態度で行うこと。ボードに寄りかかったり、観客と話をしたりしてはならない。ポケットに手を入れたままスケーティングしたり立ってはいない。前向きな態度を見せることによって、試合の対処やコントロールに自信を持っている印象をチームや観客に持たせることができる。
- レフェリーは、試合前およびピリオドの間に試合に関係のない人物がレフェリー控室に入らないようにする責任を有する。3人のオフィシャル以外に入ることが許されるのはゲーム／レフェリー・スーパーバイザーのみである。
- 試合開始前は、継続的にストレッチなどの運動をして身体的に試合に備える時間であり精神的にも試合に備える時間である。この時間をうまく活用すること。

〔試合／ピリオドの開始〕

レフェリーおよびラインズマンは、試合開始前およびピリオド開始前に最初に氷上に入らなければならない。3人のオフィシャルは、レフェリーを先頭に続いて入場しなければならない。

試合開始前，レフェリーはオフィシャル・ゲームシートを見て，選手およびチーム・オフィシャルが適切に記載され，必要なサインがすべてなされているかを確認する。レフェリーはまた，オフアイス・オフィシャルが位置につき，計時装置とゴールランプが作動することを確認しなければならない。試合前のセレモニーの後，レフェリーおよびラインズマンはそれぞれの位置につき，試合を開始する。

各ピリオド開始時，レフェリーは，フェイスオフ時に氷上にいる資格のある選手のみが氷上にいるよう確認するものとする。その他の選手は，プレイヤーズ・ベンチに直行しなければならない。この規則に違反した場合，競技遅延によるベンチ・マイナー・ペナルティが科せられる。

[レフェリーの一般的な任務]

- ピリオド開始時および得点後のフェイスオフ
- 得点後のプレーの中断。オフィシャル・スコアラーに得点およびアシストした選手の背番号を報告する。
- 規則に従ってプレーを中断し，規則違反に対してペナルティを科す。これらのペナルティはオフィシャル・スコアラーに報告される。選手の背番号，反則の種類およびペナルティの長さ（マイナー，ベンチマイナー，メジャー等）をオフィシャル・スコアラーに報告することが重要である。
- バックが競技エリアを出たり，資格のない人物に接触した場合のプレーの中断。
- 通常の肩の高さより高い位置でバックが打たれた場合のプレーの中断。
- ディフェンディング・ゾーン以外でハンドパスが行われた場合のプレーの中断。
- 競技規則に従い，両チームに試合の進行に関して平等な機会を与えること。過去の試合を考慮に入れたり試合の進め方を躊躇してはならない。
- ピリオド終了時，両チームが観客との間で何の問題もなく氷上を離れ更衣室に入ることがを注視し確認すること。何らかの問題が発生した場合は，当該チームに適切な予防策を要求すること。

- 試合後、オフィシャル・ゲームシートが不備なく記載されているかを確認する。適切であればラインズマンと共にシートにサインし、レフェリー分をとり、残りのシートをオフィシャル・スコアラーに配布させる。
- 重大なペナルティ（マッチ・ペナルティ、グロス／ゲーム・ミスコンダクト・ペナルティ等）に関しては、報告書を書き、ゲームシートに添えて試合後直ちに国内連盟事務局に送付する。国内連盟から要求があれば試合の翌日、国内連盟事務局またはレフェリー委員長に電話で重大なペナルティを報告し、追加処分の指示を仰ぐものとする。
- 外出着に着替え、できるだけ早くアリーナを出ること。反則や重大なペナルティに関する報告書について、チーム・オフィシャルと話をしてはならない。

〔試合／ピリオドの終了〕

ピリオドまたは試合の終了を告げるブザーが鳴ったら、この時点で問題が起きる可能性が高いことに注意することが重要であり、終了のブザーが鳴る前であっても、対応する準備ができていることが必要である。

レフェリーは、ピリオドが終了したらいさかいを未然に防ぐために素早く間に入るよう常にラインズマンに指示しておかなければならない。レフェリーは、氷上およびベンチにいるすべての選手が良く見える位置に立っていなければならない。またレフェリーは両方のチームに対して、レフェリーの指示があるまでそれぞれのベンチから動かないよう要請するものとする。

どのようないさかきも適切な手順をもって取り扱い、選手を離したら、出口またはベンチに戻さなければならない。レフェリーはプレイヤーズ・ベンチ付近に残り、選手がベンチに留まっていることを確認しなければならない。状況がコントロールされていることが明らか場合は、レフェリーはホームチームを先に氷上から出し、次にビジターチームを氷上から出すものとする。

レフェリーおよびラインズマンは、選手全員が氷上を出るまで氷上に留まっていることが重要である。レフェリーがラインズマンを先導して氷上から出るものとする。

レフェリーは、オフィシャルと選手の更衣室との位置関係によって、チームおよびオフィシャルが氷上から出た後でも衝突の可能性が高い場合があることに注意しなければならない。レフェリーは常に選手およびチーム・オフィシャルとの衝突を避けるよう努めなければならない。特に感情が高ぶっている試合終了直後に注意が必要である。

〔ペナルティを科す〕

ペナルティの状況をレフェリーが適切な手順で処理することによって、すべての試合参加者から敬意を得ることができる。ホッケーは感情的負担のかかるゲームであり、審判の善し悪しは、特にペナルティの状況において、常に冷静さを保ち統制する能力があるか否かである。

プレー中にペナルティの対象となる規則違反が発生した場合は、レフェリーは以下の手順を踏まなければならない：

- 反則を犯した者の背番号を記憶する

- 反則を犯したチームがバックを保持または支配している場合は、直ちにホイッスルを吹く。反則していないチームがバックを保持および支配している場合は、ホイッスルを持っていない腕を頭上にまっすぐ伸ばし、ディレイド・ペナルティのシグナルをする（写真4）。反則したチームがバックを取り支配したときには、ホイッスルを吹いてプレーを中断する（写真5）。

- ホイッスルを吹いたら、レフェリーはシグナルを出している腕を頭上にまっすぐに伸ばしたまま完全に停止する。これは、選手、コーチおよび観客の注目をレフェリーに集めるためである（写真6）。続いてレフェリーはシグナルを出している腕を下ろし、腕と手をまっすぐに伸ばして反則者を指し示す（図7）。

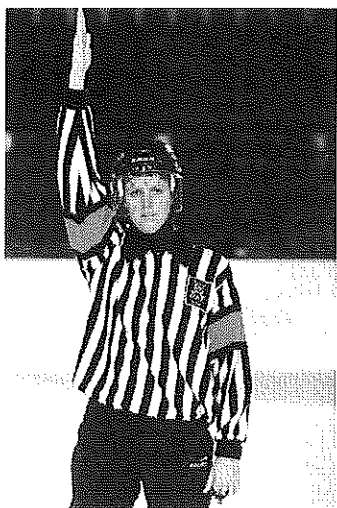


写真4



写真5

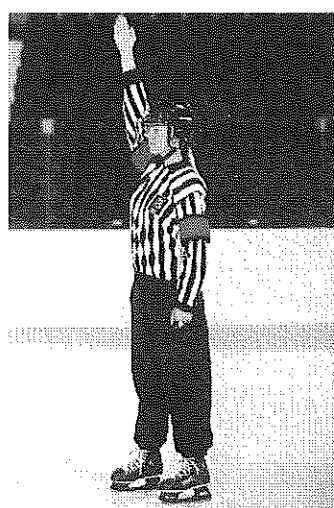


写真6



写真7

注1：反則を犯した選手がレフェリーから半径3 m以内にいる場合、腕をまっすぐに伸ばしてその選手を指し示すことは威嚇になりかねない。このような場合は、必ずしも選手を指し示す必要はない。誰にペナルティを科せられるかが明白であることを確信するために、反則した選手と直接アイコンタクトをとるべきである。レフェリーは声を出すことによって、ラインズマンにもペナルティを科せられる選手を知らせることができる。

注2：反則した選手を指し示す場合は、完全に手を伸ばす（図7）。

○続いてレフェリーは反則した選手の背番号、チームのユニフォームの色および科せられるペナルティの種類を声を出してコールし（例：14番、青、トリッピング）、その反則の種類を示す正確なシグナルを出す。

注：レフェリーはシグナルを出す際、ペナルティを科せられた選手を睨みつけないように注意しなければならない。ペナルティを科せられた選手をさらに威嚇することになりかねないからである。しかしながらレフェリーは、選手全員を視界に入れていなければならない。

○レフェリーはその後、選手全員を視界に入れたままバックスケーティングでペナルティ・ベンチに移動し、反則の種類を報告する。レフェリーの通るルートは、反則した選手の位置やそのときの試合の状況によって異なる。レフェリーは、以下の方法で、ペナルティを科せられた選手との衝突を避けるよう努めなければならない：

- ⇒素早くその氷域から離れることによって、ペナルティを科せられた選手を避ける
- ⇒まずペナルティを科せられた選手を停止させ、ペナルティ・ベンチに向かわせる
- または、
- ⇒上記2つの技術の組み合わせ

- タイムキーパーズ・ベンチ前で、レフェリーはペナルティを科せられた選手の背番号、チームのユニフォームの色、科せられるペナルティの種類と長さを報告し、反則の種類を示すシグナルを出す。レフェリーは、タイムキーパーズ・ベンチ周辺を離れる前に、ペナルティを科せられた選手に関する正確な情報がオフィシャル・スコアラーに伝わっていることを確認しなければならない。レフェリーは完全に停止してペナルティを報告するよう勧められる。但し、ペナルティを科せられた選手とレフェリーとの衝突につながり得る不必要な遅延があってはならない。時には、レフェリーは動きを止めず非常に短い停止をするか、全く停止せずに報告しようとすることがあるであろう。
- タイムキーパーズ・ベンチ付近を離れる際、レフェリーは選手全員を視界に入れたままペナルティを科せられた選手および他の選手を避けて通るものとする。
- 一つのプレー中断時に両チームにペナルティを科す場合、レフェリーは直ちにホイッスルを吹いてプレーを中断し、それぞれの選手を指して適切なシグナルを出す。これは、さらなる報復行為を防ぐためである。オフィシャル・スコアラーに複数のペナルティを報告する場合は、レフェリーはタイムキーパーズ・ベンチの前に停止しなければならない。

[重要な点]

- 常に、ペナルティを科せられた選手との直接的な衝突を避ける
- 敵意を示したり威嚇になるようなシグナル、手の動きや言葉を使わない
- ペナルティを報告するときは、選手がレフェリー・クリーズに入ることを認めない

シグナルおよび言葉によるコミュニケーションは、オフィシャルが選手、コーチ、観客およびオフアイス・オフィシャルとコミュニケーションをとる2つの手段であることを念頭に置くこと。従って、頻繁に、常に正確に実行されることが重要である。選手を威嚇するようなシグナルや言葉は、問題を引き起こし、許されるものではない。

[レフェリーのシグナル]

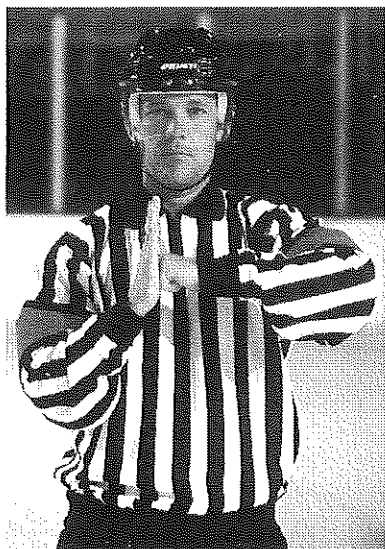


写真8

ボーディング／ボディチェック

胸の前で、一方のこぶしで反対の手のひらをたたく。

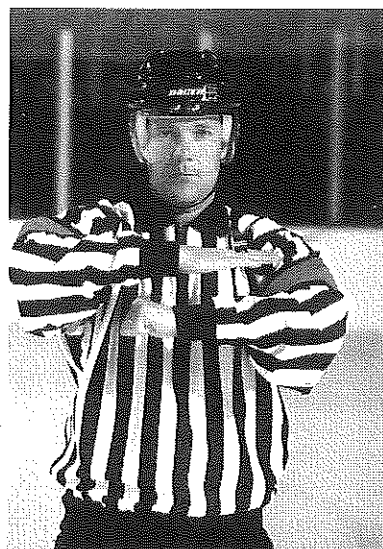


写真9

バットエンディング

両腕を胸の前で上下水平にし、下の腕を左右に動かす。上の腕は手を開き、下の腕はこぶしを握る。

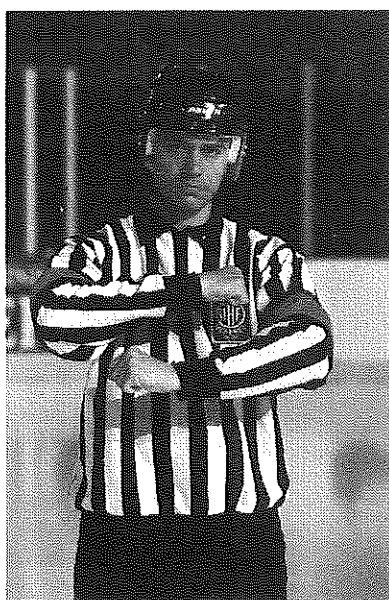


写真10

チャージング

握ったこぶしを胸の前で交互に回転する。

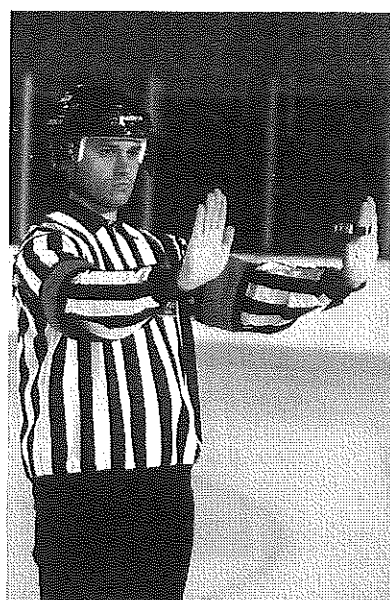


写真11

チェック・フロム・ビハインド

(背後からのチェック)

手のひらを前方に向けて開き、肩の高さで両腕をまっすぐ前に突き出す



写真12

クロスチェッキング

両手のこぶしを握り、胸から前へ約30cm突き出す。

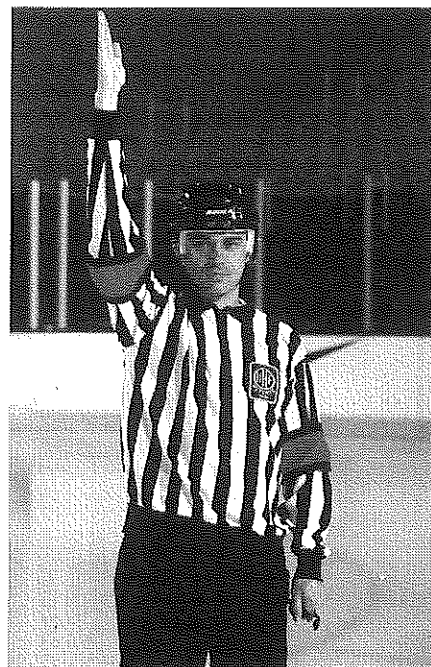


写真13

ディレイド・ユーリゾ・オブ・ベンチ

(ベンチのディレイド・コール)

ホイッスルを持っていない腕を頭上に高く上げる。

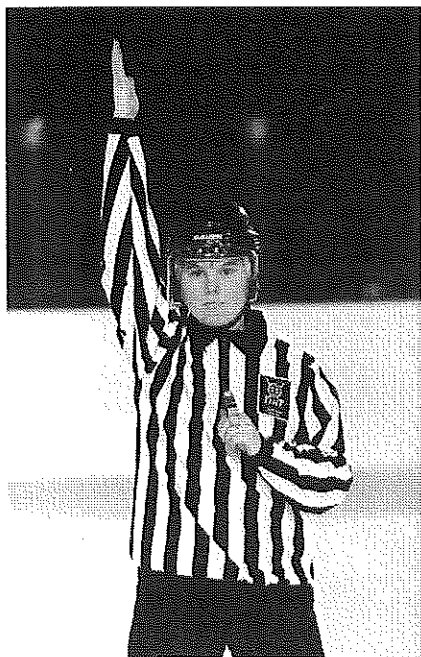


写真14

ディレイド・オフサイド

ホイッスルを持っていない腕を頭上にまっすぐ伸ばす。ディレイド・オフサイドを取り消すためには、腕を横に下ろす。

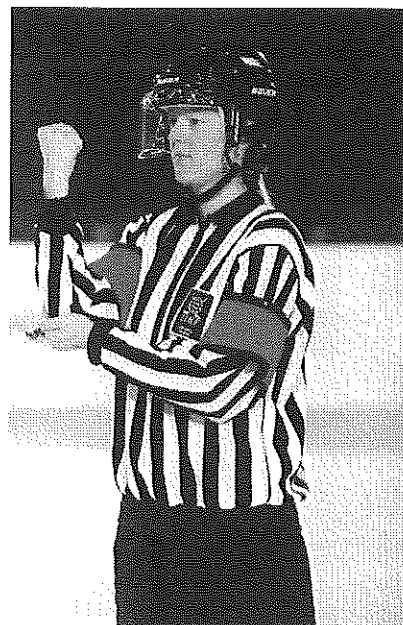


写真15

エルボーイング

一方の肘を反対の手でたたく



写真16

ゴール（得点）

手のひらを開き，ゴールを1回指す

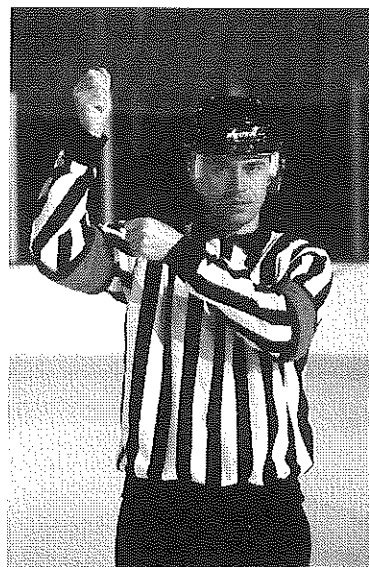


写真17

ハイスティックング

両手のこぶしを握り，一方を他方のすぐ上につけ，肩の高さで前方に上げる。

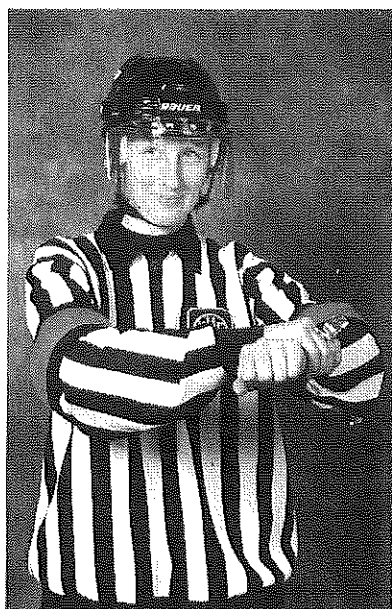


写真18

ホールディング

胸の前で，一方の手で他方の手首を握る。

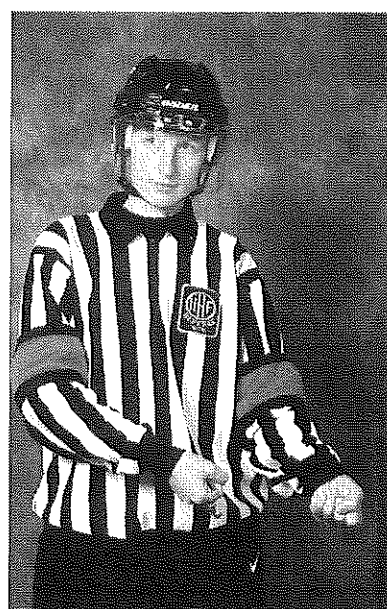


写真19

ホールディング・ザ・スティック

ホールディングのシグナルの後，通常の方法で両手でスティックを持つ動作をする。

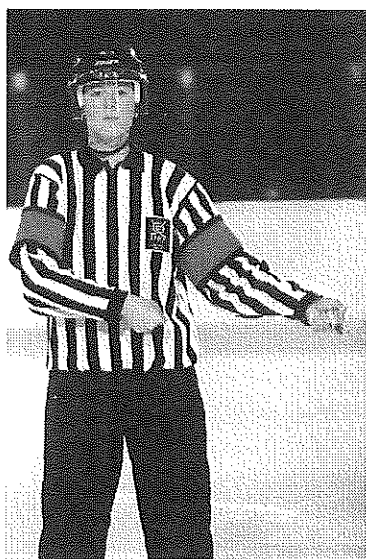


写真20

フッキング

前方から腹部の方へ何かを引き寄せるように、両腕を引く動作

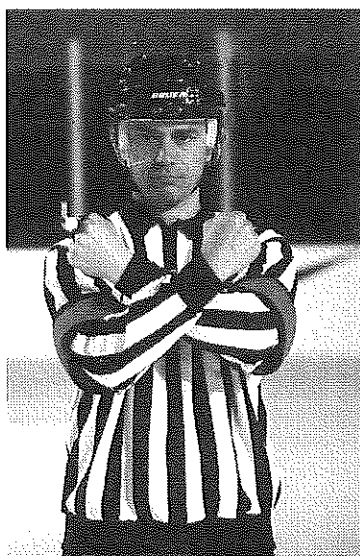


写真22

インターフェアランス

両手のこぶしを握り、胸の前で両腕を交差し静止する。



写真21

アイシング・ザ・バック

バック・ラインズマン（2人制の場合はレフェリー）は、一方の腕を頭上にまっすぐ伸ばし、アイシングの可能性のあることを合図する。フロント・ラインズマンまたはレフェリーがアイシングのホイッスルを吹くかアイシングがウォッシュアウトされるまで、腕を上げたままにする。アイシングが確定したら、バック・オフィシャルはまず両手を腕の前で交差し、適切なフェイスオフ・スポットを指し、その場所に移動する。

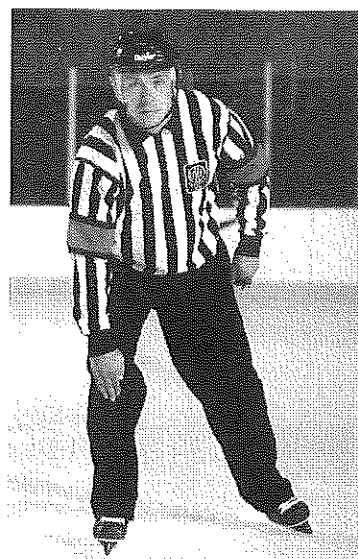


写真23

ニーイング

両足を氷上につけたまま、手のひらで一方の膝をたたく。



写真24

マッチ・ペナルティ

手のひらで頭頂を軽くたたく

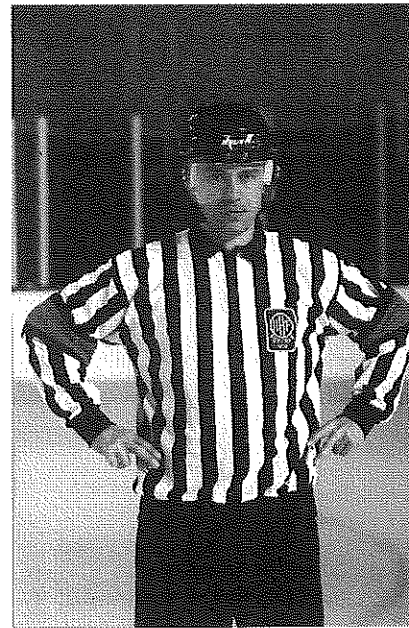


写真25

ミスコンダクト

両手を腰にあてる

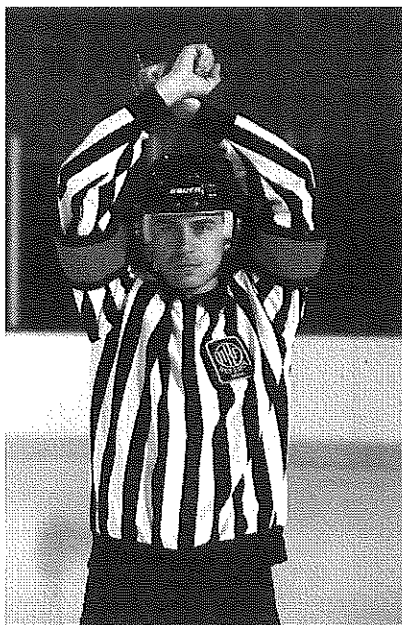


写真26

ペナルティ・ショット

両腕を頭上で交差させる。プレーが止まり次第、合図する。

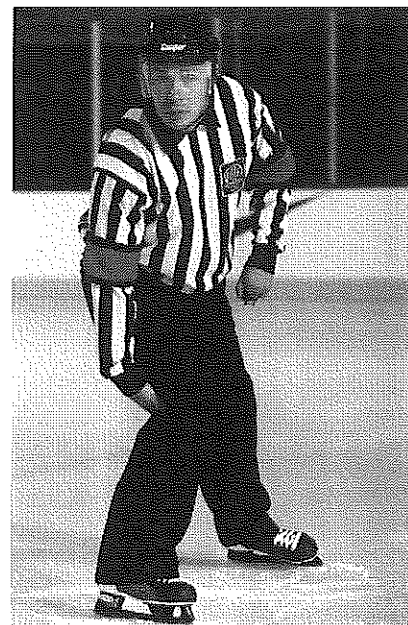


写真27

クリッピング

両足は氷上につけたまま、片手で膝の下を後ろからたたく。

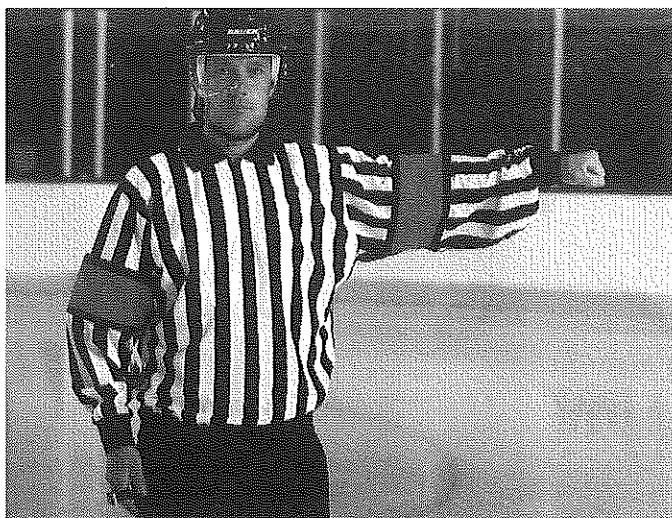


写真28

ラフティング

こぶしを握り，腕を体の横に突き出す。

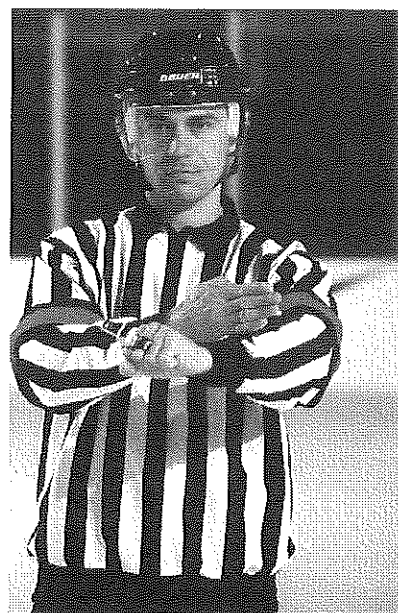


写真29

スラッシング

一方の手のひらの縁で，他方の前腕を切るように軽く叩く。

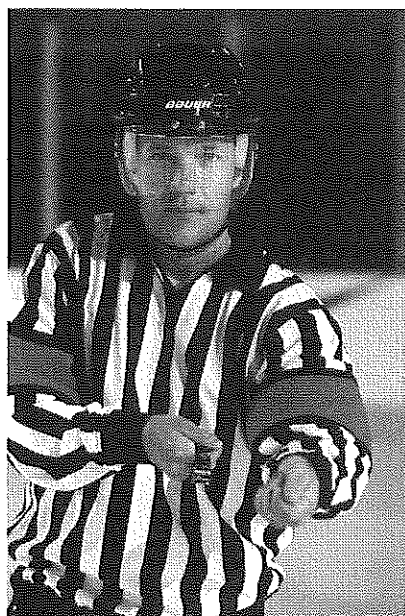


写真30

スピアリング

両手を体のすぐ前に押し出し，突く動作をし，体の脇に降ろす。

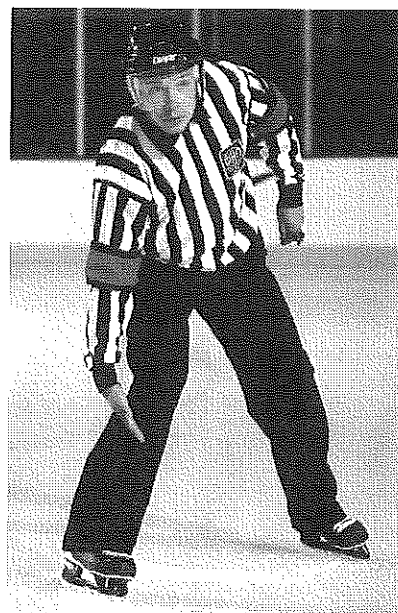


写真31

トリッピング

両足は氷上につけたまま，片手で膝の下をたたく。

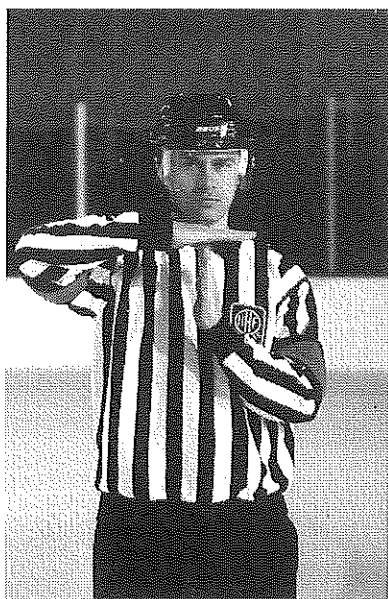


写真32

タイムアウト

胸の前に手で「T」の字をつくる。

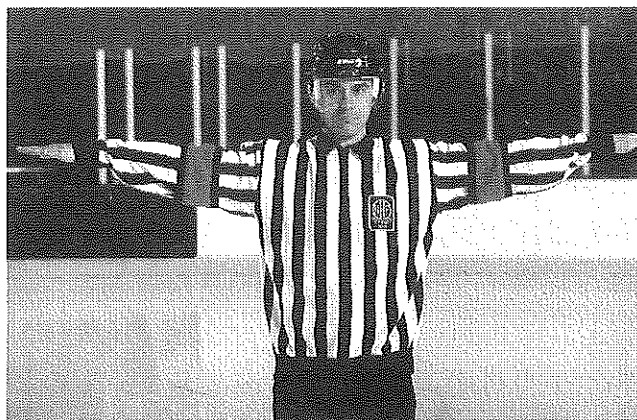


写真33

ウォッシュアウト

手のひらを下に向け，両腕を左右に広げる動作。



写真34

ハンドパス

手のひらを開き，押す動作

〔選手のライン交代の手順〕

レフェリーは，不必要な競技遅延を防ぐために，選手の交代が規則に従った範囲のものであるかを確認する責任を有する。

プレー中断中の選手交代に際し，レフェリーはまず次に行われるフェイスオフの通常的位置につく。次にレフェリーはビジターチームのベンチを向き，コーチとアイコンタクトをとりながら選手交代のための時間を5秒与える。1名から5名の選手を交代できる。続いてレフェリーはいずれかの腕を上げ，ビジターチームがそれ以上選手を交代できないことを示す（写真35）。手のひらはビジターチームのベンチに向けて腕を頭上にまっすぐに伸ばすこと。スタンドに向けてはならない。

腕を上げたまま、レフェリーはホームチームのベンチを見て、コーチとアイコンタクトをとる。今度はホームチームに選手交代のための時間を5秒与える。5秒経過後、腕を下ろし、ホームチームがそれ以上選手を交代できないことを示す。

プレー中断中、与えられた選手交代の時間が経過した後でチームが選手を交代しようとした場合には、レフェリーは氷上に出てきた選手をベンチに帰し、2度目の違反にはベンチ・マイナー・ペナルティを科すことをコーチに警告するものとする。この警告は、違反したチームにのみ適用される。

各チームとも、ベンチ・マイナー・ペナルティを受ける前に、1回の警告の猶予がある。

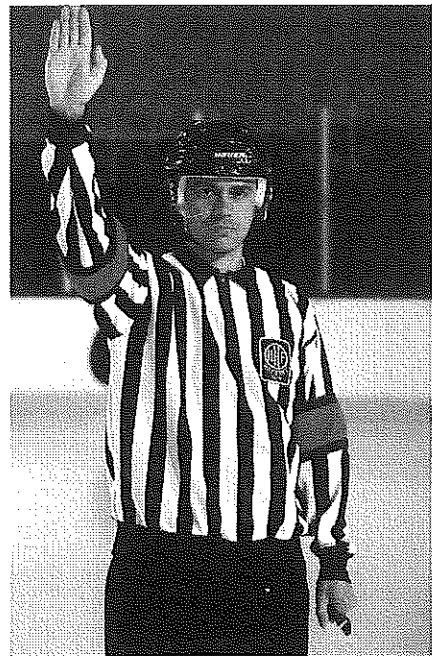


写真35

プレー中断中、チームが数回に渡って選手交代をすることがある。ホームチームが最後に交代する権利を行使することを望むならば、この手順に厳密に従わなければならない。チームは、1回のプレー中断中に1回の交代のみ認められる。

レフェリーはすべてのプレー中断時にこの手順をとらなければならない。これによって両チームが正確な手順で選手交代を行い、不必要な競技遅延を確実に防ぐことができる。

注：

- このシグナルを出す際、レフェリーは横柄な態度にならないよう注意すること。この手順を形式だけで行うことは、コーチと共同した競技遅延につながる。
- 腕を伸ばす際、手のひらはベンチに向ける。
- 選手交代に関する合図を受けるため、それぞれのチームのコーチとアイコンタクトをとる。
- エンドゾーン、特にベンチと同じサイドでフェイスオフを行う場合、コーチから見える場所に移動すること。
- 2人制の場合、バックをドロップするオフィシャルがこの手順を行う。

〔いさかい（乱闘）〕

いさかいが起きた場合、選手たちは相手に集中し感情が高ぶることが多い。いさかいがどこで発生し、それに対して何を発言し、何ができるかを把握しているレフェリーは、非常に暴力的な状況を速やかに抑制することができる。

まずレフェリーは、氷上の選手および両チームのベンチがよく見える場所に立たなければならない。重要なのはレフェリーは常に全選手を注視し、いさかいの間に入って行かないことである。

次にレフェリーは、全選手を注視しながら接近し、自分が選手達に何を要望するかを口頭で指示する。

レフェリーは、いさかいと反対側のサイドに離れて立ち選手がそれを中止することを期待して見ていてはならない。また選手が聞き入れそうにない口頭の指示をすべきではない。

ラインズマンが選手を離したら、レフェリーはラインズマンに対して、選手を誘導してペナルティ・ベンチに行くよう指示する。レフェリーはいさかいの発生した場所に残り、全選手を注視し、各チーム1人ずつの選手に、氷上に残された防具を拾うよう指示する。選手がベンチに戻ったら、レフェリーはペナルティの報告を開始する。

必要に応じて、レフェリーはキャプテンまたはキャプテン代行に対して、科されたペナルティを伝えるべきである。但し、各チームに科されたペナルティを伝達する前に、レフェリーはオフィシャル・スコアラーに報告しなければならない。これによって時間が節約でき、ペナルティを計時装置に表示する機会をタイムキーパーに与えることができる。ペナルティに関するチームとの協議は、明確かつ簡潔に行わなければならない。

プレー中断時につかみ合いやいさかいが頻繁に起きるようになった場合、レフェリーはまずコーチに警告を与え、再度発生した場合はアンスポーツマンライク・コンダクトによるマイナー・ペナルティおよびミスコンダクト・ペナルティを科すものとする。

〔ゴールに関する論争およびその他の論争〕

得点が認められたときでも、得点が認められなかったときでも、それについての論争が起これば必ず感情は高ぶる。レフェリーは冷静さを保ち、すべての判断は最終的に自分にあることを念頭に置いて状況をコントロールしなければならない。

レフェリーがその状況を直接見てコールする位置にいた場合、レフェリーの判断は最終であり、ラインズマンまたはゴールジャッジとの相談や話し合いは一切必要ない。

レフェリーの位置がプレーと接近しており、得点を認めたならば、レフェリーは得点についての一般的な手順に従わなければならない。重要なのは、レフェリーは冷静さを保ち、状況をコントロールして、いかなる選手にも他の氷上オフィシャルやゴールジャッジと相談したり彼らを非難するのを認めないことである。レフェリーはキャプテンまたはキャプテン代行に対して、その決定を一度だけ説明し、それが最終決定であることを説明するものとする。

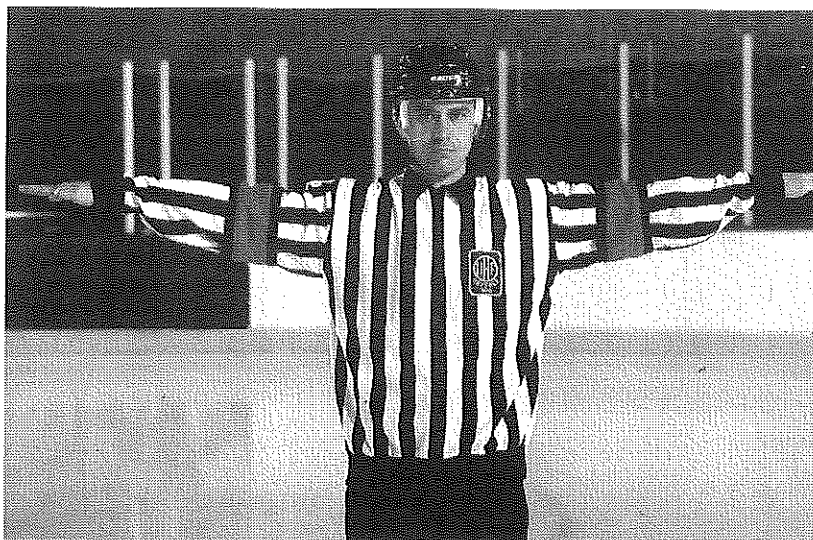


写真36

プレーの結果、得点が認められなかった場合、レフェリーは直ちにウォッシュアウトのシグナルを出し（写真36）、プレーが中断したら次のフェイスオフ・スポットを指し示す。レフェリーは、いかなる選手にも他の氷上オフィシャルやゴールジャッジに相談したり彼らを非難するのを認めてはならない。レフェリーはキャプテンまたはキャプテン代行に対して、その決定を一度だけ説明し、それが最終決定であることを説明するものとする。

レフェリーが状況を直接見てコールする位置にいなかった場合、最終決定を下す前に相談することが必要になるだろう。レフェリーは最初にラインズマンに相談し、彼らが直接見てコールする位置にいたかどうかを確認する。もしラインズマンがその位置にいた場合、レフェリーはラインズマンの報告に基づいて判断を下すものとする。レフェリーは必ず両方のラインズマンと相談しなければならない。ラインズマンが直接見てコールする位置にいなかった場合、レフェリーはゴールジャッジと相談するが、ゴールかノーゴールかだけを話し合うこと。レフェリーの判断にゴールジャッジが不服の場合もあるであろう。重要なのはゴールジャッジがレフェリーの決定に反論したり、無礼な態度を示すことを認めないことである。ゴールジャッジが反抗的な態度を示したり、不公平な判断をした場合にはゴールジャッジを交代させることも必要になるだろう。

試合の途中にラインズマンが歩み寄って来たり、ラインズマンと協議するときには、オフィシャル全員が冷静さを保ち、コントロールしていることが重要である。レフェリーは試合に関する全責任を負い、状況および協議をコントロールしなければならない。

レフェリーは、レフェリーとラインズマンが協議している場所から全選手を遠ざけ、選手がその協議の内容を聞かないようにしなければならない。次にレフェリーは、全選手を視野に入れながら、ラインズマンに対し何を見たかを冷静かつ正確に報告するよう求める。重要なのはレフェリーがその協議をコントロールし、必要であれば速やかに、とるべき措置を決定することである。

ラインズマンからの報告に基づいてペナルティを科したり決定を下す場合には、必ずその前に両方のラインズマンと協議しなければならない。チームワークは、優れたレフェリングの非常に重要な要素である。

〔用具の計測〕

キャプテンまたはキャプテン代行を通じてチームから用具計測の要求が出された場合は、直ちに計測が行われなければならない。

チームから正式に用具計測の要求がされない限り、レフェリーによっていかなる計測も行われぬ。計測はレフェリー・クリーズ内で行うよう勧告されている。何らかの防具やスティックが選手またはオフィシャルに対して危険であると思われる場合、レフェリーは計測の要求がなくてもかかる道具を試合から取り除く権限を持つ。

要求された用具計測をレフェリーが行っている間、両チームの選手はそれぞれのプレイヤーズ・ベンチに戻ることが望ましい。各チーム1名ずつの選手が、レフェリー・クリーズ付近でレフェリーの決定を待つことを認められる。ラインズマンの一人は、常に全選手を視界に入れておくこと。

スティックの曲度を計測するため、スティックのヒールの固定したポイントからブレード先端のいくつかのポイントまで線を引く。曲度は、それらの線とブレードとの間で計測される。ヒールとはスティックのシャフトとブレードの底辺が交わる点のことをいう（写真37～40）。



写真37

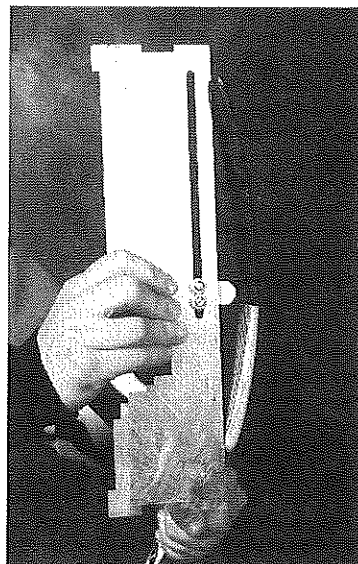


写真38

要求された計測をレフェリーが行った後、各チームのキャプテンまたはキャプテン代行にレフェリーの決定が報告される。スティックまたは用具の測定の結果、不正が認められなかった場合、計測を要求したチームにベンチ・マイナー・ペナルティが科せられる。不正な用具は、不必要に試合を遅らせることなく、取り除かれるか、修正または調整されなければならない。計測された用具はすべて、直ちにチームに返還されなければならない。

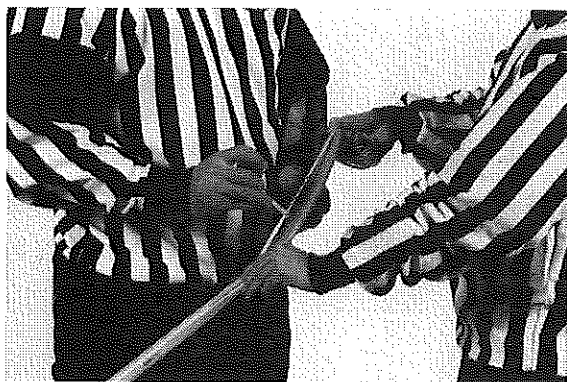


写真39

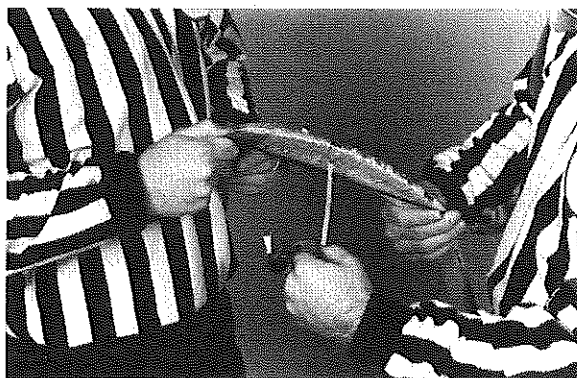


写真40

得点が認められた後のプレー中断時は、スティックの計測は認められない。

キャプテンからスティック計測の要求があった場合、レフェリーはまずスティックを確保し、どの部分を計測するかをレフェリーに対して指示させなければならない。

国際アイスホッケー連盟競技規則およびケースブックには、特定の用具の寸法と、用具計測に関してレフェリーが必ず守らなければならない指示が記載されている。

〔ゲームレポートの作成〕

以下は、報告が必要な状況に関してゲームレポートを作成する際に従わなければならない基本事項である；

- どの程度の処分または出場停止が妥当と考えているかを誰とも話し合わないこと
- 国内連盟会長、レフェリー委員長またはリーグ代表者に、試合後直ちに電話をし、口頭で報告すること。
- ゲームレポートは、発生した出来事をレフェリーが鮮明に記憶しているうちに記載されなければならない。但し、オフィシャルに対する身体的な嫌がらせに対してマッチ・ペナルティを科した場合などは特に、冷却期間を置くことが勧められる。
- 文法的に正しく、誤字や脱字なく適切に、読みやすい字でレポートを書くこと。オフィシャルはスコアシートとゲームレポートに氏名を活字体で記載するものとする。
- 詳細を記載すること：試合の日付け、チーム名、試合開催地、担当オフィシャルの氏名
- どのオフィシャルがその出来事を見、誰がペナルティをコールしたかを記載し、それに関連する選手の氏名、背番号、規則の何条に基づいてどのペナルティが科されたかを記載する。
- もしあれば、その引き金となった出来事、何が発生したのか、その結果何が起きたのかを詳しく記載する。
- 1枚を国内連盟に速やかに送付し、1枚は控えとしてレフェリーが持つこと。
- リーグまたは連盟に呼ばれた場合、報告した事項だけ述べる。視点を変えてはならない。会議への出席を求められた場合、必ずレポートのコピーを持参すること。
- 個々のリーグは、ゲームレポートに関するレフェリーの手順について、独自のものを持っていることがある。レフェリーは、ゲームレポートがリーグや国内連盟の基準を満たした内容であるかを確認する責任を有する。
- 国際試合（トーナメントやエキシビジョン）において重大な反則が発生した場合は、国際アイスホッケー連盟にレポートが提出されなければならない。

○国際ルールに従い、レフェリーは以下の事項について報告する責任を有する；

1. すべてのマッチ・ペナルティ
2. すべてのグロス・ミスコンダクト・ペナルティ
3. すべてのゲーム・ミスコンダクト・ペナルティ
4. チーム・オフィシャルに対するすべてのゲーム・ミスコンダクト・ペナルティ
5. 控室とリンク間を移動中のゲーム・オフィシャルに対する、身体的または言葉による嫌がらせ
6. ゲーム・オフィシャルまたはすべての選手の保護または安全に関連するすべての問題
7. 試合前のウォームアップ中に発生し、レフェリーに目撃された問題、あるいはラインズマンまたはスタンバイ・レフェリーが目撃しレフェリーに報告したすべての問題
8. 試合後に発生したすべての問題

[ペナルティ・ショット]

試合中にペナルティ・ショットが与えられた場合、レフェリーはそれが与えられた時間、ショットを行うよう指名されたプレイヤーの背番号、ゴールの成否がオフィシャル・ゲームシートに記録されていることを確認しなければならない。ペナルティ・ショットが与えられた場合、レフェリーは以下の手順に従わなければならない；

○ペナルティ・ショットを行うプレイヤーの背番号と名前をアナウンスする

○パックをセンター・アイスに置く

○ペナルティ・ショットを行うプレイヤーに対して、以下の適切な手順を指示する；

⇒プレイヤーはパックを相手ゴールに向かって進めなければならない（パックとともに後ろへ戻ってはならない）

⇒プレイヤーは一度だけシュートすることが認められる。パックを一度打った時点でそのプレーは完了したものと見なされる。同様に、プレイヤーはゴールキーパーに対して1回のプレーのみ認められ、リバウンドを得点することはできない。

⇒プレイヤーに対して、レフェリーがゴールラインの位置に着き、ペナルティ・ショット開始を合図するホイッスルを吹くまでショットを行わないよう指示する。

○ゴールキーパーに対して、以下の適切な手順を指示する；

⇒ゴールキーパーは、プレイヤーがバックに触るまでゴールクリアーズ内に留まらなければならない。プレイヤーがバックに触る前にゴールキーパーがクリアーズから出た場合かつ得点が入らなかった場合、ペナルティ・ショットをやり直すものとする。

⇒ゴールキーパーは、正当な方法である限り、どのような手段でペナルティ・ショットを防いでも良い。

⇒ゴールキーパーがスティックまたはその他の物を投げたり、故意にゴールを動かしたり、ヘルメットやフェイス・プロテクターを故意に脱いだりした場合、得点が認められる。

○その他すべての選手に、リンクサイドに下がり、センター・レッド・ラインの後ろにいるよう指示する（日本では、ペナルティ・ショットを行うプレイヤー以外はすべて氷上から上げるようにしている）。

○レフェリーは、ゴールから3～4.6m離れたゴールライン上に位置するものとする。レフェリーは、ショットがよく見えるように、プレイヤーのスティックと同じサイドのゴールの横に立つことが望ましい。

○一方のラインズマンはレフェリーと反対側のゴールライン上に立ち、レフェリーよりやや遠い位置に留まる。このラインズマンの任務は、レフェリーと同様の方法でプレーを見ることである。但し、レフェリーから要請があった場合のみ報告または解釈を述べるに過ぎない。このラインズマンは一切シグナルを出さない。

○もう一人のラインズマンは、プレイヤーズ・ベンチと反対側のセンターラインに位置する。このラインズマンは、ショットを行うプレイヤー以外の選手全員をセンターラインの後ろに留まらせ、ペナルティ・ショットの間にチームからの妨害がないようにする責任を有する。

○プレイヤーがペナルティ・ショットで得点できなかった場合、レフェリーはホイッスルを吹きエンドゾーン・フェイスオフ・スポットを指し示す。

○プレイヤーがペナルティ・ショットで得点した場合、レフェリーはホイッスルを吹きゴールネットを指し示す。

注：ペナルティ・ショットの間、計時装置は止められる。

< ま と め >

本章では，レフェリーの技術を向上するための基本的なガイドラインと手順を示した。これらの技術を実践するための十分な知識と弛まぬ努力によって，自信を持って試合に臨み，試合に貢献できるようになるであろう。

5. 問題発生までの経緯、発生時の状況、負傷者の有無、問題発生後に起こったできごとなどを詳しく記載してください。状況の説明のため、裏面の図をお使いください。読みやすい字で記入してください。

6. この問題の中で両チームに課せられたペナルティすべてについて、当該選手の背番号、ペナルティの種類、ペナルティの時間および I I H F 規則の条項番号を記載して下さい。

ホームチーム : _____

ビジターチーム : _____

背番号	ペナルティの種類	分 数	条項番号	背番号	ペナルティの種類	分 数	条項番号
_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____
_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____
_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____
_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____
_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____
_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____
_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____

下図を使い、説明してください

本報告書は担当レフェリーが記入し、試合後速やかに J I H F レフェリー・スーパーバイザーに提出のこと。
大会終了後、J I H F 事務局にコピーが提出される。